

ついのべ抄

#006

朝が弱くて、

化粧は丹念で、

店を選ぶ決断は早くて、

米よりパスタが好きで、

怒るよりも叱るような口振りで、

はにかむような笑顔で、

家に帰って真っ先にするのが

化粧を落とす事で、

シャワーより風呂が好き。

彼女の中でも僕のお気に入りは、

そっと笑って言う「おやすみ」。

腕時計を5分遅くしている理由は

「他の人より5分得してるの」

と言う、

彼女の時計をこっさり正しく戻してから

彼女と会えなくなってしまった。

時間が遅れていたのは

僕だったのだと気が付く5分前の話。

無謀で向う見ずで無鉄砲な事で

他校でも有名な親友は3階の窓を蹴った。

止める間もなく

真っ白なシャツをはためかせて落下する。

階下のプールに高い水柱。

程なく教師の怒鳴り声がする。

夏はとうに過ぎてしまったというのに。

雨が降る。

雨が降る。

線になった雨を引っ張ったら

雨雲がごっそり抜けて、

月が顔出した。

「お月さん見つけ」

傘の下からご挨拶。

お月さんは光っている。

コピー室の窓から外が見えた。

地平線付近に溜まった夕日色が

富士山の影を浮き彫りにしていた。

この時ばかりは

軒を並べた家々が海のように見えて、

思いがけず郷愁に浸る。

すんと鼻をすすれば耳に残る、

まだ幼い頃の私の笑い声。

「雨が降るね」

と彼女が云う。

空は曇っているものの

まだ降り始めてはいない。

「匂いでわかるの」

得意気な彼女はまるで犬のよう。

「じゃあきみは猫だね。」

寒くなるとすぐに丸くなる」

不満を感じると

すぐにやり返すのが彼女だが、

僕の事をよく見ているのもまた、彼女だ。

鼓膜を掠る耳鳴りに振り向いても

見知らぬ誰かと目が合うだけだった。

右肩をノックされた気がして

空を仰いでもだだっ広い青空だけだった。

服を引っ張られたと思って

再度振り向けば、

遠くに走っていく秋の

後ろ姿だけが見えた。

もうすっかり冬だった。

朝方に浮かぶ判の跡のような明星や、

平日の昼間に歩く交差点や、

電車が橋げたに差し掛かった時の揺れや、

夜や、

朝や。

今この季節の空気も音もひっくるめて、

今日も僕はデシヤヴする。

曇天の電線搔い潜って

どこまでも跳べるし翔べる自由自在。

どこまで飛べるかは私の自由次第。

爪先は擦れて踵は潰れ、

履き潰したスニーカーに

生えろよ、映えろよ羽。

コタツで横になっていたら、
うっかり昼寝していた。

隣で転がる携帯電話には
新着メールが1件。

一気に目が覚めて

開いたメールは出会い系。

心拍数返せと放り投げた。

所在なく見やった窓に雪。

拾った携帯電話でシャッター切って
メールで送る。

返信は肉まんが2つ並んだ画像だった。

ついのべ抄

#006

了

Written by nakoso (as inabetz)

© nakoso 2012

<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

Release Date 2012/1/14

Twitter (as inabetz):

<http://twitter.com/inabetz>

Mail:

nakosokan@gmail.com



「ついのべ抄 #006」

by nakoso is licensed

under a Creative Commons 表示-非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>